

トピック ―平成25年上半期の野菜の輸入動向―

平成25年上半期の野菜全体の輸入数量は、前年同期比90%の135万トンとなり、4年ぶりの減少となった。

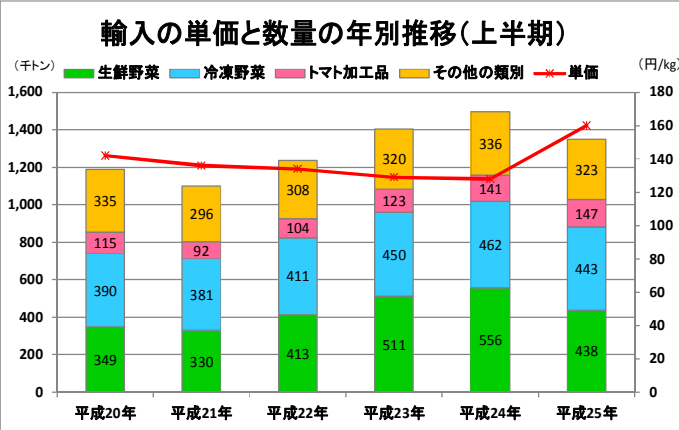
類別に見ると、生鮮野菜は同79%と大幅に減少したものの、冷凍野菜は同96%で若干の減少に止まり、トマト加工品は同104%とやや増加している。

類別に輸入単価と輸入数量を前年と比較してみると、

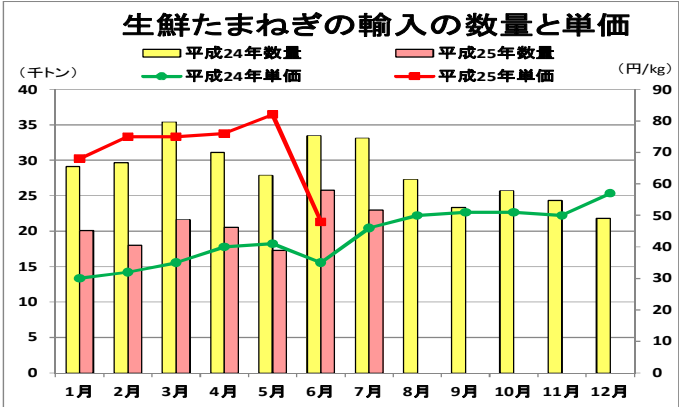
① 生鮮野菜は、バラつきはあるものの、輸入単価が上昇して、輸入数量が減少している品目が多い。これは、昨年末以降の円安が、輸入単価の上昇要因になっている中で、そもそも生鮮野菜の輸入が、国内生産の状況等に左右されるところ、この時期の国産野菜の価格が安値傾向で推移していたこと等によるものと思われる。なお、トマトや結球レタスは、輸入単価が上昇しているにもかかわらず、輸入数量も増加しているが、これは、ゼリー部分が少ないトマトや冬場のレタスの業務用需要が堅調であり、国産では時期的なものを含めて十分対応できていないことによるものと思われる。

② 一方、冷凍野菜やトマト加工品は、生鮮野菜に比べ、輸入単価の上昇の程度が低く、かつ、一定の範囲に収まっており、輸入数量もそれほど変動していない。これは、円安により輸入単価が上昇したものの、食生活の洋風化や簡便化志向により、輸入の冷凍野菜やトマト加工品に一定の需要があることの表れと思われる。特に、トマト加工品は、年間の輸入数量が決められている「トマトピューレ等関割」を除き、増加が目立つが、トマトが健康に良いとの研究成果等を受けてトマトジュース等の需要が好調なことが影響していると思われる。ばれいしょの輸入数量は、外食産業での在庫調整の影響で、大きく減少している。

今後も円安の状況が続くとしても、生鮮野菜の輸入は、国内生産の状況等によって大きく左右されることから、需要動向を十分に踏まえつつ、安定的に生産できる体制を確立することが重要である。特に、輸入量の多いたまねぎについては、中国産が豊作で、輸入単価が急落してきており、今後の国内生産の状況が注視される。また、冷凍野菜等については、需要が堅調であり、今後、品質の良いものを製造する国内の産地を育成することが課題となっている。

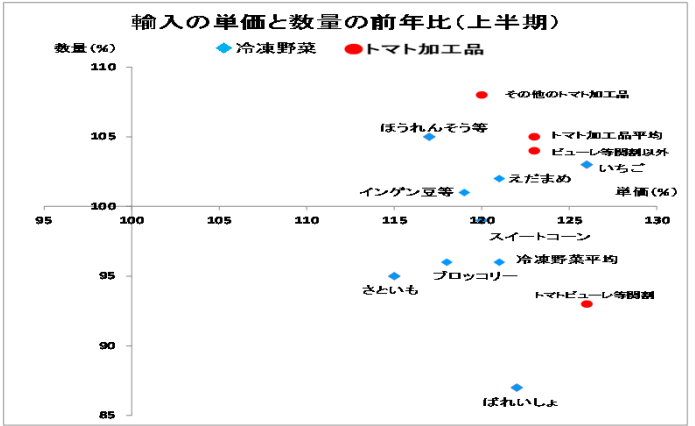
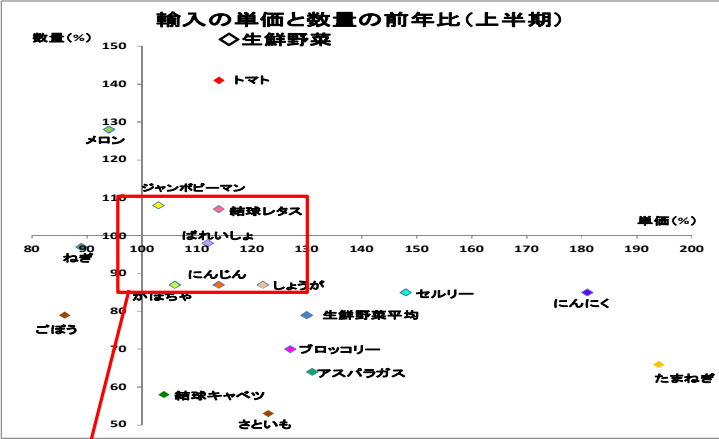


資料: ペジ探(原資料)財務省「貿易統計」



資料: ペジ探(原資料)財務省「貿易統計」、農林水産省「植物防疫統計」

注: 平成25年7月の輸入数量は植物防疫統計の検査数量を用いている。それ以外は貿易統計の数字による。



資料: ペジ探(原資料)財務省「貿易統計」

●問い合わせ先 独立行政法人農畜産業振興機構 野菜需給部 需給業務課 村野、三部、山田 TEL03-3583-9483、FAX03-3583-9484 ご意見、ご要望をお寄せください。

◆「野菜の需給・価格動向レポート」は月2回公表しています。公表時にメルマガでお知らせしますので、ご希望の方はペジ探のトップ画面、メルマガ配信登録・解除ボタンから登録してください。

★この「野菜の需給・価格動向レポート」は、[http://vegetan.alic.go.jp/vegetable\\_report.html](http://vegetan.alic.go.jp/vegetable_report.html) に掲載しています。